

小樽市

明治44年竣工の手宮高架棧橋

炭鉄港

ストーリー



(小樽市総合博物館提供)

機関車庫三号と転車台



現在の旧国鉄手宮線



旧三井銀行小樽支店



昭和初期の手宮駅構内



(小樽市総合博物館提供)

改修前の小樽運河



石炭の積出港と

小樽市の歴史は、室蘭市と同じく松前藩時代にアイヌと交易を行う商場（あきんば）が置かれていたことから始まります。明治時代となり、蝦夷地から北海道に呼称が改められ、開拓使の本府が札幌市に定められると、海の玄関口である小樽市にヒトやモノが集まるようになっていきます。さらに、北海道初となる官営幌内鉄道の手宮（小樽）〜札幌間が開通すると、小樽港は開拓民の上陸や物資陸揚げの港として新たな役割を担うことになり、北海道経済の中心都市として飛躍をもち、北海道の開拓に重要な役割を担っていきます。

特に、幌内鉄道開業後の手宮地区は、北海道近代化の輸送拠点として大きな発展を遂げ、石炭の集積地・積出港として多くの人が賑わう地区になっていきます。この頃には、様々な石炭・鉄道関連の施設が建設され、明治44年には、巨大な石炭積み込み施設である「高架棧橋」が建設されるなど、幌内炭鉱と幌内鉄道が小樽の経済的な柱となっていました。

やがて、軍事などの輸送力増強を図る必要性から鉄道の国有化が行われると、手宮〜南小樽の路線は「手宮線」となり、石炭の積み出しの役割は新たに整備された築港地区に移っていきます。

このように、小樽市は小樽港や幌内鉄道など海運や交通の要所を有し、国勢調査では大正9年まで函館市に次ぐ、道内2番目の人口を誇っていました。

海運都市の発展と観光都市への転換

日露戦争後に樺太が割譲されると、小樽港は樺太への中継港などの役割を担い、貨物量が急増したため、運搬作業を効率的に行うことが急務となりました。そこで、様々な検討を進めた結果、海面を埋め立てた「運河式」が決定し、大正12年に小樽運河が完成します。

また、海運業の発達などに伴い、金融業の必要性が高まり、市内初の銀行支店である旧第四十四銀行小樽支店を皮切りに、合計20以上の銀行が進出しました。日本銀行小樽支店は、札幌支店が開設されるまで、道内唯一の支店でした。

しかし、昭和後期になると、石炭鉱山の閉山などによる海運・金融の冷え込みなどの影響で、まちも冷え込みましたが、現在では、小樽運河や石造倉庫群などの歴史的建造物を観光資源として積極的に活用し、小樽市は北海道を代表する観光都市として有名になりました。

特に、小樽市の観光スポットとして有名な小樽市総合博物館には、幌内鉄道を運行していた蒸気機関車を当時の姿に復元し、明治・大正時代に建設された機関車庫や転車台と一緒に展示してあります。北海道の鉄道発祥の地として、当時と変わらぬ姿で保存されている旧手宮鉄道施設は国指定の重要文化財に指定されており、「炭鉄港」のストーリーを辿る上で重要な施設でもあります。